備陽史探訪の会３月例会
平成１４年（２００２）３月３日実施

神辺の史跡巡り

講師　備陽史探訪の会会長　田口義之

本日のスケジュール

８：３０駅北口発⇒９：００亀山遺跡⇒９：４５要害山城跡⇒１０：４５堂々川の砂⇒１１：３０迫山古墳群⇒１２：００備後国分寺・昼食⇒１３：１５国境、滝山城遠望⇒１３：３０掘居館跡⇒１４：００塔谷廃寺⇒１５：００足長古墳⇒１５：３０古城山⇒１６：００菅茶山記念館⇒１７００北口着

備陽史探訪の会事務局

〒７２０－０８２４福山市多治米町５丁目１９番８号

電話０８４（９５３）６１５７

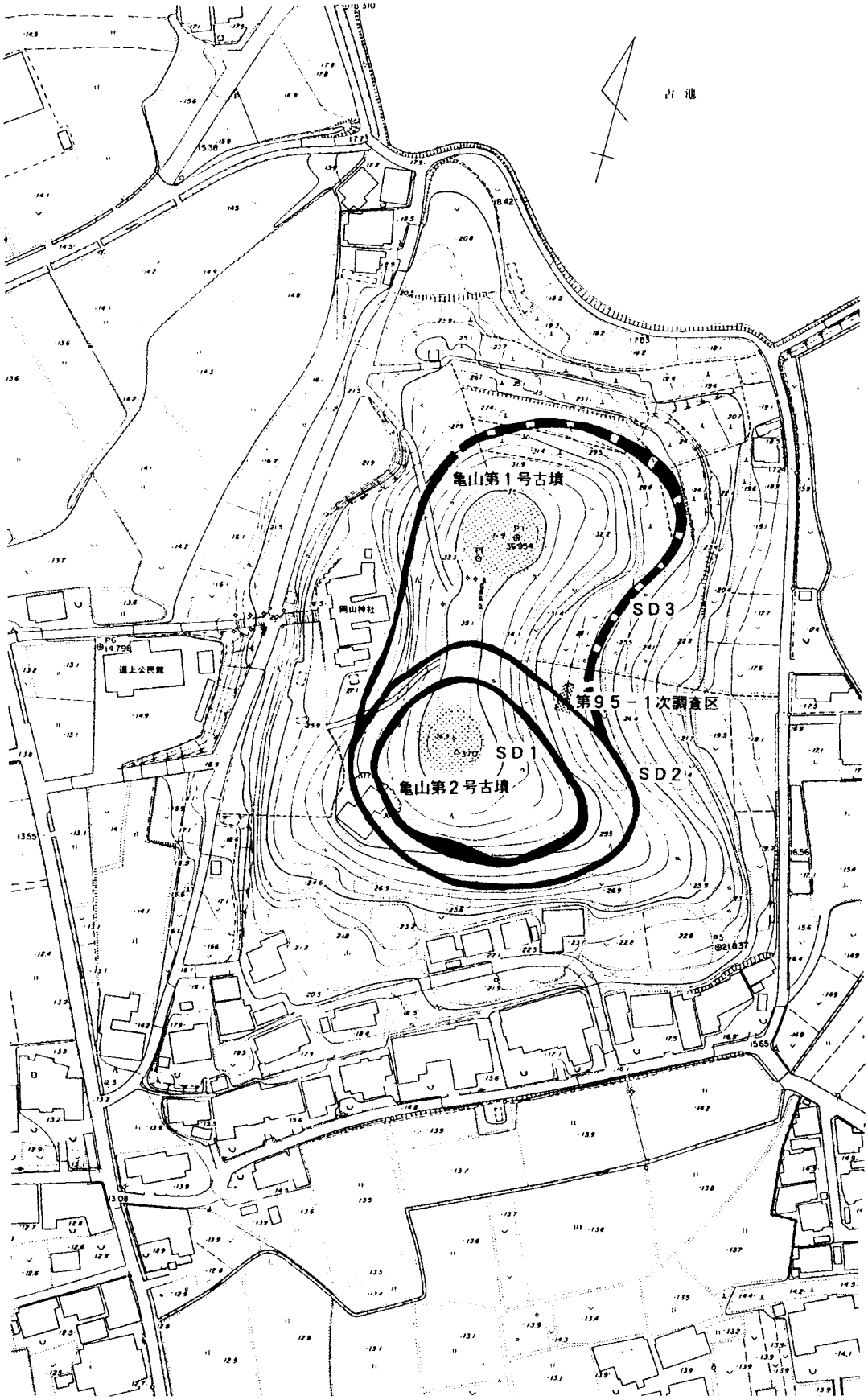
亀山遺跡

深安郡神辺町道上にある亀山遺跡は、弥生時代前期に造られた三本の環濠（かんごう）を持つことで知られる遺跡である。神辺平野の中央北側に、島状に残る独立丘陵（標高三十七㍍）を中心とした、五百㍍四方の範囲が遺跡として推定されている。丘陵一帯から土器、石器の出土することで以前から知られており、昭和十六年に県の史跡指定を受けた。その後、昭和三十二年の日本考古学協会による学術調査において、農耕を行った初期段階の集落跡であることが分かり、広く注目されることとなった。しかし近年、遺跡周辺において宅地開発が進む状況となったため遺跡の範囲・内容を確認し、保存措置を講ずることを目的とした発掘調査が、昭和五十六年から五年間にわたって行なわれ、多くの成果をあげている。その中で特に注目されるのは、遺跡のある丘陵を取り巻くように掘られた三本の環濠の発見である。丘陵は約七十㍍の距離をおいて南北に二つの頂部をもつが、その南側の頂部を巡る一本の環濠と、丘陵全体を巡る二本の環濠が確認された。このうち一番内側を走る溝は、南東側に、やや張り出した円形をしており、幅約二、七㍍、深さ約一、四㍍、総延長約二百㍍の規模。その外側の溝は、約十㍍の距離をおいて内側の溝に沿う形で巡っており、一番外側の溝は、幅約四㍍、深さ二㍍、南北約百六十㍍、東西約百三十㍍程度の範囲を囲むものと推定されている。これら三本の溝は弥生時代前期の、ほぼ同時期に掘削され、前期の末には埋没したものと考えられる。環濠に囲まれた内側からは、環濠が存在した時期と同じ時期の建物跡などの遺構は現在のところ発見されていないが、環濠の中から出土する多量の遺物などから、農耕を生活の糧とする人々の集落が存在したものと考えられる。また環濠が埋没した後も、集落が存在しており、丘陵のすそ付近も含めた全域に分布しているものと思われる。古墳時代には、南北二カ所の頂部に古墳が築かれ、平安時代には八稜（りょう）鏡、鉄刀、土師器（はじき）などを納めた祭祀（さいし）遺構も見られ、これらの時期には祭祀・埋葬に関連した遺構が広がっていたものと思われる。亀山遺跡とほぼ同時期の環濠集落として大宮遺跡があげられるが、距離的に近い場所にあることから密接な関係にあったものと言える。しかし大宮遺跡が平地に存在するのに対して亀山遺跡は丘陵上に位置するといった、集落の立地で異なった状況を示している。このことは遺跡の性格を知る上で重要な問題点と言える。亀山遺跡は、備後の弥生時代を語る上で最も重要な遺跡である。現在までの調査で数多くの成果をあげることができたが、弥生時代前期の住居跡、あるいは水田跡などの在在がまだ確かめられておらず、今後さらに詳しい調査が行なわれ、亀山遺跡の実態が解明されることが望まれる一方、遺跡の保護についても万全を期すことが望まれる（大上裕士『備後の主要遺跡』）

亀山一号古墳

位置　深安郡神辺町道上中川。

概要　本古墳はいわゆる神辺平野の北縁の独立丘（標高三七㍍）上に位置する。この丘陵は早くから県内の弥生遺跡を代表する亀山遺跡が存在することで知られているが、この遺跡の範囲確認調査の段階で本古墳の存在が明らかになった。古墳は丘陵上の北端にいとなまれており、直径二八㍍前後、高さ約二㍍の円墳である。一九八二年と一九八三年の発掘調査で内容が明らかにされており、主体部は粘土槨であっ



第17図　遺跡周辺地形図（1：2000）

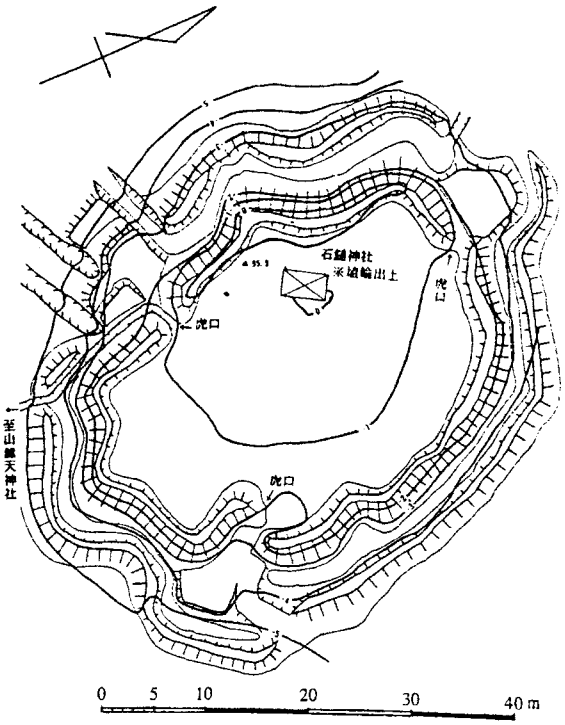
た。槨内には長さ約三、六㍍、幅約〇、五㍍の割竹形木棺があったようである。棺内には豊富な遺物が副葬されていた。東半部では竪櫛十四、鉄剣三、刀子五、玉類多数、中央部では刀子八、滑石製小型勾玉六五、同小玉六六〇、竪櫛二、刀子形の石製模造品などがあった。西半分の主要遺物は短甲で、胴内には鉄刀一、鉄剣二がおかれ、また竪櫛一七もあった。一方、西端には砥石が一個あり、これに接して一五〇本前後の鉄鏃塊が出土した。棺外の遺物としては、槨上面から筒形銅器一、鉄矛一が出土している。本古墳は五世紀代にいとなまれたものと推察されるが、この芦田川下流域では粘土槨を主体とした例は少なく、また、豊富で多彩な出土品をもつが、鏡が副葬されていないなど、多くの研究課題を含んでいる（脇坂光彦『探訪広島の古墳』）。

要害山城跡　深安郡神辺町徳田

本会城郭研究部会が、一九九二年二月、古墳研究部会の協力を得て、測量調査を実施した中世山城跡である。

同城跡は、神辺平野の中心からやや東よりに位置する独立丘陵の西側の主峰、標高九五、九メートルの要害山の山頂に存在し、従来より土塁・空堀・城門跡の遺構を良く残した山城跡として各種の文献に紹介されて来た。調査の結果、城自体は、山頂を南北約四〇メートル、東西三〇メートルにわたって楕円形に削平し、周囲を二重の土塁と、その間の空堀によって取り囲んだだけの簡単な構造であることが分かったが、細部には「升形門」の型式を持つ虎口跡など、戦国期の山城としては極めて興味深い遺構を残していることが判明した。

山頂主郭を取り囲む土塁は、上端幅約一メートル、高さ内側約〇、五メートル、外側約二メートルを測り、塁線は複雑に屈曲して、所謂



要害山城跡主郭平面図　「備陽史探訪」57号より

「折」（横矢掛り）を形成している。折は、曳線に死角を無くすために考案された築城法で、近世に至って完成する極めて高度な技術である。当城の場合、折は全周にわたって見られ、屈曲部に立つと左右の曳線を横に見渡すことが出来、単純な縄張りに、いかに変化を持たせようとしたか、築城者の苦心を察することが出来る。

内側の土塁と、外側の土塁の間は、上端幅約五メートル、深さ約二メートルの空堀となっている。普通、当地方の山城の場合、空堀は尾根に直交した堀切が一般的であるが、この城では、主郭を取り囲む「横堀」となっている。横堀も近世城郭に多く見られる築城法で、堀底を通路として利用することによって、防御力の向上を図ったものである。この城の大きな特徴は、虎口に「升形」の型式を取り入れていることである。升形は、城の出入り口に方形の小空間を作ることによって城門を二重にし、防御力の強化を計った比較的新しい築城技法である。この城の場合、虎口は北・東・西の三カ所に見られ、何れも升形門の型式を取っている。特に東のものは遺構の残りが良く、戦国期の升形門として典型的なものである。

この横堀と升形の組み合わせにより、当城は単郭の簡単な構造にもかかわらず、大きな防御力を持った山城となっている。城内に侵入しようとする敵は、まず外側の土塁を突破し、空堀を渡って内側の土塁に取り付くことになる。しかし、内側の土塁は二メートルの高さを持ち、しかも折によって城内からの死角はほとんどない。また、虎口から侵入することも困難であったと考えられる。虎口は、三カ所共升形が形成され、城内に入るためには二重の城門を突破しなければならないのである。

要害山城跡は、西麓に天神社が鎮座することから、「天神山城」として江戸期の文献に紹介されている。城主は宮若狭守、同民部左衛門と伝え、一番詳しい『西備名区』は、「宮若狭守は、本来新市亀寿山城主で、同城の落城後、この城に居城したのであろうか。しかし、同人の名前は各所に残っているから、この城に居城したのではなく、この辺りも宮氏の領地で、その名を伝えたものであろう」と考察している。宮氏は、戦国初頭までこの付近に勢力を持った有力豪族で、当城が同氏によって築かれたとする伝えは理由のあることである。しかし、今日残る遺構を見ると、折・横堀・升形等、戦国中期以降の様相を色濃く残し、宮氏が居城したと伝える年代と若干のずれがあるようである。

記録の上で、周辺が大きな戦乱の渦に巻き込まれたのは、天文年間（一五三二～五五）の神辺城合戦に際してである。『西備名区』等によると、この戦いで攻城側の大内・毛利の連合軍が本陣を置いたのが、当城南麓の「秋丸」で、秋丸の名は安芸衆（毛利）の本陣に因むという。当城の土塁上に立って南方を望むと、合戦の舞台となった神辺城は指呼の間である。また、東西の虎口は、南方から城兵の出入りが見えないように工夫されている。

これらのことから、当城は室町後期、宮氏によって築城されたとしても、現在残る遺構は、この神辺合戦に際して、攻城側の向城として使用された時のもの、と考えられる。　なお、現在この城への登山道は、西南麓の天神社境内から設けられているが、この道は、外側の土塁線を破壊しており、本来の登城道とは考えられない。城への登城道や、山頂部以外の城郭構造、周辺の遺跡との関連などは、今後の研究課題である。（田口義之『山城探訪』）

堂々川六番砂留

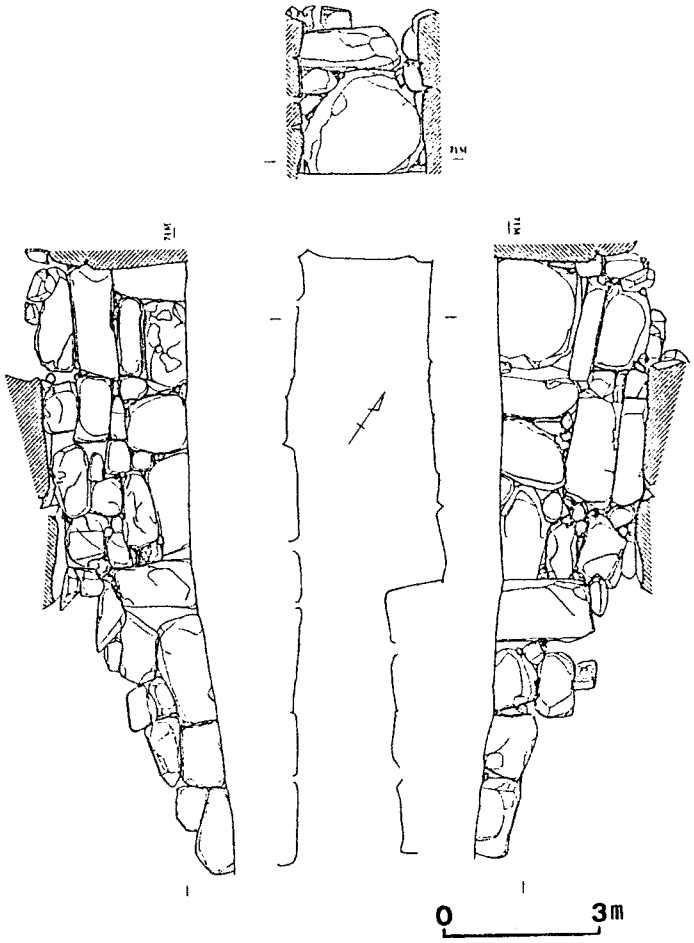
所在　神辺町西中条　水系：堂々川

『とうとう大砂留普請』（天保六年（一八三五年））記録にある『とうとう大砂留』で、他の一、三、五番と同じ典型的な石塊段積堰堤型式の砂留である。堰堤底部は、石積方式からみて相当以前に積み上げられたものらしく、記録はないが、一七〇〇年代の乱層乱石積で最初の砂留跡とおもわれ、その上に記録にあるような大砂留を増築したものと推定される。その後明治十五年になって嵩上げ増工を行い、現在堤高十三、三㍍、堤長五五、八㍍の堰堤となっている。この六番砂留は、堂々川砂留群の中でも大型で、風格があって江戸時代に築き上げた福山藩の誇る石積技法の素朴ではあるが重厚さを誇る一つであって、文化財的にも、学術的にも重要かつ貴重な資源の一つと考えられる。（広島県編『広島県砂防水害史』）

迫山第一号古墳

位置　深安郡神辺町場野迫山。

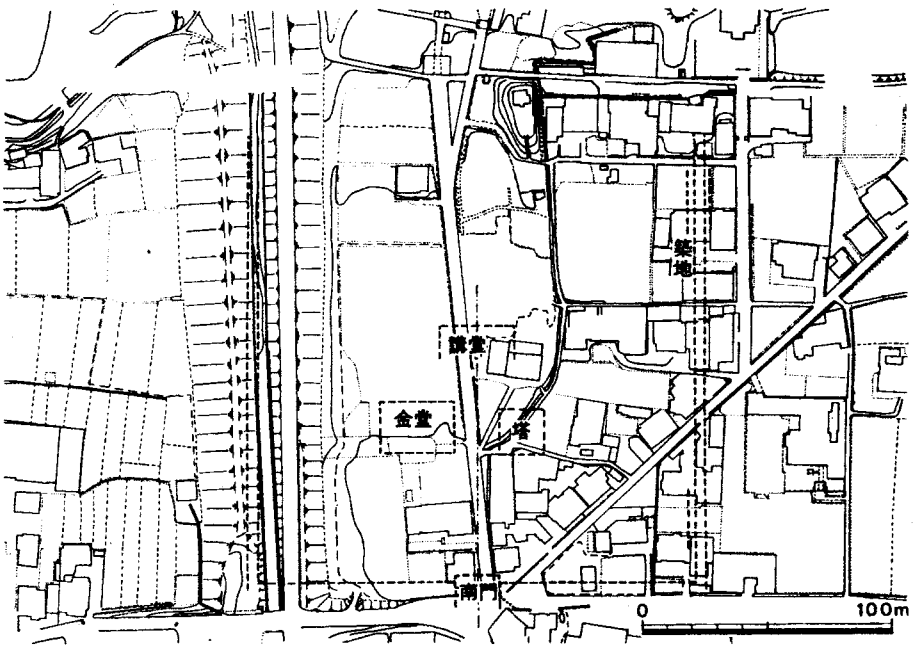
概要　南に神辺平野を見おろす標高約八四㍍の丘陵上に位置し、南西に近隣して藤原宮式軒瓦を出土した小山池廃寺跡、南東には備後国分寺跡がある。本古墳は現在十一基が確認されている迫山古墳群の盟主的な古墳と考えられており、一九八三年と一九八六年には神辺町教育委員会によって発掘調査が行なわれている。墳丘は直径二一、四㍍、現存の高さ五㍍の円墳で、四㍍もの盛土がなされている。主体部は片袖式の横穴式石室で、全長十一、六㍍、玄室の長さ六、四㍍、幅二、五㍍、高さ二、八㍍と県内でも最大級のものである。平安時代末頃には開口し、内部は撹乱を受けたようであるが、副葬品としては武器類（単鳳環頭大刀一・直刀二・鉄鏃二〇）、馬具類（絞具二）、装身具類（勾玉一・管玉一・切子玉二・棗玉一・ガラス玉一七・土製練玉二百以上・耳環八）、土器類（須恵器杯一・提瓶一・平瓶一・高杯一・土師器高杯一・椀二）などが出土した。玄室には幼児を含む四体程の埋葬が推定できる。出土遺物から六世紀後半でも末に近い時期に築造されたものと考えられ、単鳳環頭大刀の出土、また一振の直刀の鍔に銀象嵌の文様がみられること、さらに、古墳の規模などから、神辺平野東部地域で、畿内政権と密接な関係をもちつつ台頭してきた最有力家族の墳墓と考えられる（佐藤昭嗣『探訪広島の古墳』）。



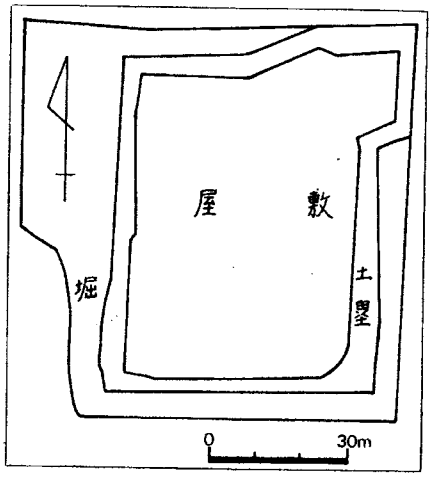
⑤

備後国分寺跡

神辺町のほぼ中央部を遮断するように天井川となった堂々川が貫通している。北端の山際には、川の東に接して古義真言宗の唐尾山国分寺がある。旧山陽道から入る参道の両わきには松並木があり、果樹園や墓地に囲まれた古刹（さつ）のたたずまいが残っている。現在の本堂は江戸時代の建立で、奈良時代に建立された国分寺は現国分寺の前面に埋もれている。天平十三年（七四一年）、聖武天皇は諸国に布令して国分僧寺・尼寺を建立させた。備後国分寺跡については、門前や周辺から古瓦が出土することから、推定はされていたものの、遺跡の様相は全く不明であった。一九七二年から七六年にかけて、県教育委員会や草戸千軒町遺跡調査研究所によって四次にわたる発掘調査が行われ、これまで全く不明であった寺域と伽藍配置が明らかになった。果樹園や民家が立ち並んでいるため、トレンチによる部分的な調査しかできなかったが、金堂跡。塔跡・講堂跡および南門跡、築地跡が検出されている。伽藍配置は東に塔、西に金堂、その背後に講堂が並ぶいわゆる法起寺式であったと推定されるが、残念なことに塔・金堂を囲っている中門跡・回廊跡は検出されていない。寺域の東西は六〇〇尺（約百八十㍍）と想定される。これは塔・金堂の中心線（寺院の推定中軸線）より東九〇、三㍍で東面の築地跡と内外の側溝を検出したことからの推定で、中軸線より折り返した西面築地跡は堂々川の提防下になり、調査は不可能である。南北については旧山陽道に埋もれた南門跡から、仮に北へ六〇〇尺とると、ちょうど現国分寺の仁王門の前面に納まることからみると、やはり六〇〇尺かやや南北に長い寺域であったものと思われる。塔。金堂跡ともに、基壇土の化粧や礎石は失われ



ており、わずかに版築された基壇土を検出し、塔は一辺十八㍍、金堂は東西二九、四㍍、南北二十㍍と推定される。構堂跡は版築土と礎石列が検出され、東西三十㍍と推定されるが、南北は明らかにできなかった。出土遺物は、大量のかわら類とともに、土師器・須恵器・緑釉陶器などが出土している。軒丸瓦は一〇型式、軒平瓦は九型式があり、奈良時代から室町時代にわたるものが出土している。代表的な組み合わせは重圏文と重郭文のセットである。なお、寺跡の下層には弥生後期の集落跡が埋もれている。広大な御領遺跡の一部で、寺跡とともに貴重な遺跡である。全国の国分寺跡は国の重要な史跡として指定が行われ、保存が図られているが、備後国分寺跡はいまだ指定されておらず、早急な保護策が必要である。（松下正司『備後の主要遺跡』）



推定復元図

堀館跡

本遺跡は、神辺町大字上御領字堀に所在する。同所は、南方に下山丘陵、北方に高屋川、さらに御領丘陵の間に位置する。現状は、宅地、水田、畑、墓地からなるが、地割のうえに明らかに中世土豪の館跡が伺える。推定屋敷地は水田となっているが、その周囲は畑地、墓地となり土塁基底部の痕跡を留めている。墓地は土塁上に築かれたものと思われ、往時の姿を残している。さらにその外側は水田となっているが、鍵田と呼ばれ堀の跡と推定される。同所付近には、東方に滝山城跡、また小舎垣内、皇垣内等と呼ばれているところがある。今後、これらのものと関連させて調査されるべきものと考えられる。（神辺郷土史研究会『神辺の歴史と文化』）

塔谷廃寺跡

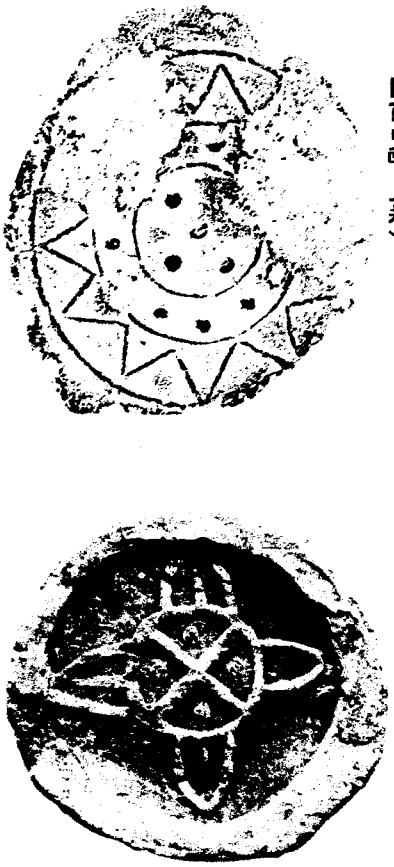
遺跡の現状　古墳時代の前期から中期にかけて山頂および陵線に群在する箱式棺の出土で有名な、神辺町下竹田狭間の神辺平野南側の丘陵地帯に昔から塔谷と呼ばれる地名が存在し、布目瓦を出土することが知られていた。同地点は現在狭間八幡社の境内となっていて、本殿敷地の東南に一段下がってやや広い平地が存在し、現在荒神社が祀られている。この附近一帯から布目瓦が出土し、かつての寺院址の存在を思わせる。塔谷の名の示すように、塔が建立されていたかは発掘調査を経ていない現在、礎石の確認もなくにわかに判断しがたい。

遺物　蓮華文軒丸瓦は非常に崩れた蓮華文の二種類が発見されている。第一種は外区素文帯でその内部に大形の鋸歯文帯がめぐりさらに

十一個の連珠文帯を陽刻し、内区の蓮弁はすでに忘失されて、ただちに五顆の連子となった非常に硬化されたものである。第二種はこれも本来の蓮華文の姿が忘れられ、外区は陰刻の鋸歯文帯をめぐらし、内区の蓮弁は四枚の中央に弁子を想像さす一線のある硬化のはなはだしいもので、中央に四顆の連子をX字の中に一顆すつ入れた紋様である。

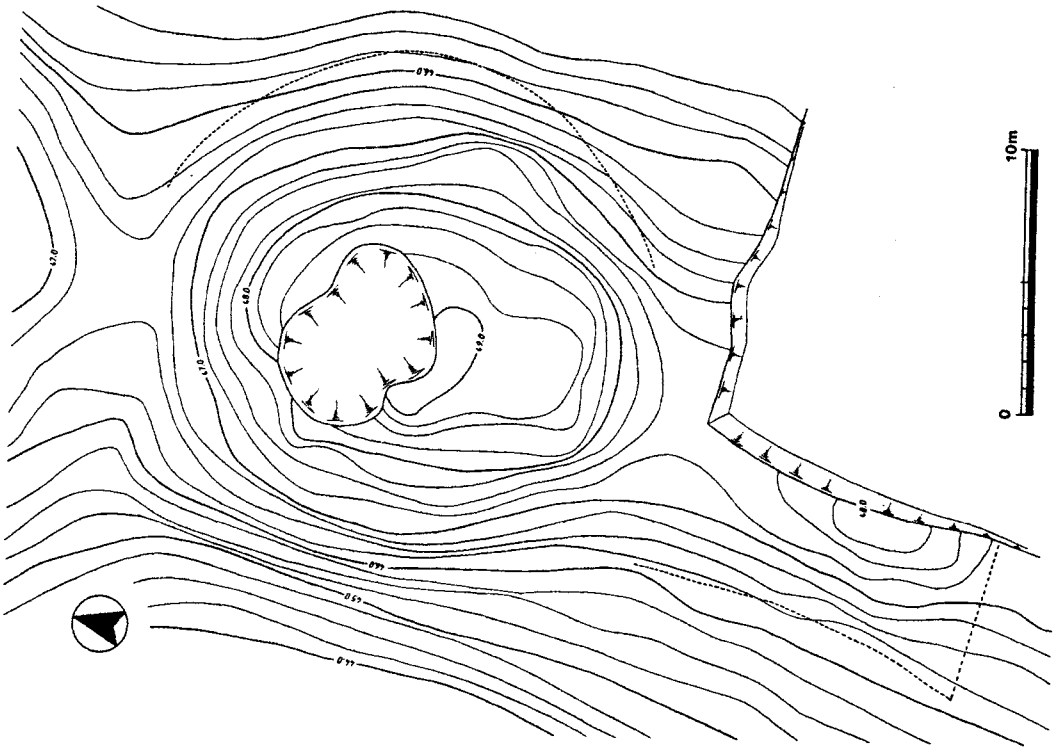
唐草文軒平瓦　軒丸瓦第二種とセットとなったものと考えられ、意味のわからなくなった陰刻がわずかに均正唐草文を模したものと推測される、ごく粗末な紋様が附されている。その他土師器の破片なども散在している。

考察　出土する軒瓦の紋様から推測すると奈良時代の蓮華、唐草紋様が原形を忘れるほどの硬化で、平安時代も下だった時代のものと考えられ、あるいはその時代に、地名で塔谷と伝えるようにこの地に塔が建立されたものだと考えられる。しかし瓦の紋様などからして、神辺平野周辺の奈良時代栄えた寺院に比して非常に工芸的にも田舎造りである点などは、この寺院の性格を物語る一面があろう。（村上正名『福山市史』上巻）



足長古墳

深安郡神辺町の中央を流れる高屋川は、神辺平野（狭義）と呼ばれる沖積平野を形成した。この平野には、縄文時代から近世にわたる複合遺跡の大宮遺跡と御領遺跡が立地する。この平野は、北と南を東西に延びる丘陵に囲まれ、とりわけ北側の丘陵には迫山第一号古墳をはじめ数多くの古墳がみられ、群集墳を形成している。しかし、高屋川左岸では数基の小円墳からなる辺木・江草古墳群と横穴式石室をもつ観音寺古墳や名越古墳が確認されているにすぎない。足長古墳は昭和初期に盗掘され、一九八〇年まで忘れ去られていた古墳で、昨年末に墳丘の測量調査が行われている。この古墳は、高屋川左岸の標高一九七㍍の山から高屋川に向かって北に延びる狭長な丘陵尾根にあり、平地からの比高約三五㍍、墳頂部は標高四十九㍍を測る。地形的な制約を受けながらも尾根を最大限に利用して築造され、府中市街地まで、芦田川流域を一望できる、きわめて眺望のきく位置にある。測量の結果、この古墳は全長約三十四㍍で主軸線が、ほぼ真北に向き、前方部が南に延びる前方後円墳で、後円部は直径約二十㍍、高さ約三㍍、後方部は畑のため東半分を削平されているが、長さ約十四㍍、推定幅約十二㍍、くびれ部幅約九㍍、高さ約1㍍の規模でふき石・列石・埴輪などは見られない。急峻（きゅうしゅん）な斜面を利用し、視覚的に巨大化を図っているため、西側のすその部分は明りょうでなく、後円部は正円形とならない。後円部頂部には盗掘坑がみられ、後円部前面には幅約三㍍の溝が走っている。前方部は、ほぼ同じ高さを保ち、先端に向かってわずかに広がる。また、後円部前面にある溝を共有する墳頂都に広い平担（へいたん）面を有する円墳が想定され、そのため、こ



の古墳が尾根先端部に築造されなかったものと考えられる。さて、芦田川流域の前方後円墳は古墳時代前期の潮崎山古墳（芦品郡新市町）・石鎚権現第五号古墳・掛迫第六号古墳（福山市）と後期の二子塚古墳（福山市）が明らかにされているに過ぎない。そして、これらが小地域における首長墓であるだけでなく芦田川流域に対し統帥権も付加されていたとの考えを含めてこの古墳をみれば、立地・規模から古墳時代前期の築造で、御領遺跡を中心とする諸集団の首長の墓と考えられる。また、被葬者の属する集団が高屋川左岸には想定できず、平野の北側の丘陵でなく眺望の著しい当地に築造している点にも、前述の前期首長墓とともに芦田川流域における統帥権の移動なども考えていかねばならない。神辺平野ばかりでなく、芦田川流域の中での古墳の位置づけが必要で、正式な調査が待たれる古墳といえよう。（佐藤一夫『備後の主要遺跡』）

古城山城跡

古城山城は、神辺城の東北方における小丘で東は平野に境し、古城山の名をもって呼ばれているので便宜かくは称することとする。この山は既に原史時代の部で記述しているように、古墳が営まれていたのを、頂点を削平して城郭となしたもので、昭和九年高屋川の改修により切り取ったとき石槨があらわれたといわれ、十数年ののちもなお須恵器の破片が散じていた。更に昭和三十一年には大々的に掘り下げて、公営住宅を建築したので、全く城郭としての形態をのこしていない。この丘陵は、円錐状の小岡の南にいま一つの小丘があって、前方後円墳とも見られていたが、その後円部が本丸で、前方部に二の丸ともいうべき郭が設けられ、堀は古墳時代からめぐらされていたとも思われ、

地形によってそれがうかがわれる。西方山腹の八幡社（昭和九年山頂に移した）は宗教的な防備として、その冥加は大きなものとされていたことであろう。（高垣敏男『神辺町史』前編）

菅茶山

【一七四八（寛延元）年二月二日～一八二七（文政一〇）八月十三日】

福山藩の朱子学者であり漢詩人。名は晋師、字は礼卿、通称を太中といい、茶山はその号である。備後国安那郡川北村（現深安郡神辺町川北）の出身。一七九二（寛政四）年、福山藩から五人扶持を支給され、一八〇一（享和元）年、藩の儒官に登用、一八〇九（文化六）年には三〇人扶持大目付格となった。父菅波福平は神辺駅の東本陣本荘屋を継いだが、のち別家して農業、酒造業を営んだ。一七六六年（明和三）年、茶山十九歳のとき、医者になることを志して上洛し、和田東郭に医を、市川某に古文辞学を学んだが、のちその非を悟って朱子学に転じ那波魯堂の門に入った。以後六度上京遊学し、西山拙斎、頼春水、混沌社の葛子琴、中井竹山ら、京阪在住の学者や文人との出会いや交流を深めた。一七八〇（安永九）年春の遊学後の天明年間初めに「少々学種たへ申さず候へば、後来あるひは人材出し候」ことを望みとして、神辺駅中の七日市の一隅に「黄葉夕陽村舎」と呼んだ家塾を開き村童たちの教育への道を歩みはじめた。

一七八六（天明六）年福山藩の弘道館設立の際、教師として招かれたが病気を理由に断り、一七九二年には家業を弟の圭二に譲り、家塾の経営に専念した。一七九六（寛政八）年家塾の永久存続という考えから、塾施設と塾付きの田畑を藩に献上し郷校とした。このときから廉塾あるいは神辺学問所と呼ばれるようになった。茶山は塾経営にあたって、免租地となった田畑からの利米に余裕があれば、山林田畑を買い求めたり、講師を増やすように心掛け、教師が塾を私物化、世襲化することを厳しく禁じていた。茶山は自らも講釈を行い、彼を助けるものとして都講を置いた。都講には仲立大蔵、藤井暮庵、頼山陽、北条霞亭、門田朴斎らがいた。茶山は書、和歌、狂歌などに秀でていたが、中でも漢詩は当時第一人者とされ、山陽道を上下する一流の文人や墨客は、必ずといってもよいほど彼の塾に立ち寄った。頼一族、古賀精里、浦上玉堂、田能村竹田、伊能忠敬ら有名無名の人たちの名が「菅家往問録」に見られる。彼の詩は、塾の生活や神辺を中心とした農村に題材を求め、叙景と叙情がほどよく調和し清新で穏健である。「実境を写し、実感を歌う」ことを信条とした。一八一二（文化九）年に刊行された詩集『黄葉夕陽村舎詩』は大評判をとった。彼の編著には紀行では『遊芸日記』『北上日記』『大和行日記』、随筆では『筆のすさび』、思想では『冬の日かげ』、教育では『菅太中存寄書』『廉塾規約』などがあり、藩命により『福山志料』『御問状答書』を編集している。墓は深安郡神辺町大字川北字帰の網付谷にあり、墓誌銘は頼杏坪が撰している。（菅波哲郎『広島県大百科』）

春

春月

四郊紅塵夜未收
林頭月色澹含愁
小閣期人人不至
生憎花影上欄頭

四郊の紅塵(こうじん)　夜いまだ収まらず
林頭の月色　澹(たん)として愁いを含む
小閣　人を期して　人至らず
生憎(あいにく)　花影　欄頭に上る